



前3千年紀シュメール、 多神教の世界

早稲田大学文学部教授

前田 徹



はじめに

ご紹介にあずかりました前田です。戸外の空模様を忘れて聞き入るといことになるのか、そうでないのか、ちょっとわかりませんが、私は講演というものが得意ではありませんので、その点、最初にお断りしておきます。

講演の題目を「前3千年紀シュメール、多神教の世界」としました。舞台となるのはシュメールですが、西アジアの地図にありますように、トルコ、イラン、イラクのなかで、シュメールとは現在のイラクの南部に当たります。エジプトと同時期に世界最古の文明が築かれた場所です。

シュメールの地はアジアの西の端でありますから、極東とされる日本からはもっとも遠いアジアになります。また対象とする時代も、今から4千年以上昔の、前3千年紀であり、時間的にも地理的にも最遠のシュメールを対象にお話することになります。

ちなみに、1千年紀という、年を千で勘定することは、現代史では使いませんが、私などが研究する古い時代ですと、100年の世紀よりも、もう一つ上の千年の単位で考えるほうが考えやすいということで、千年紀をよく使います。

ここにいらっしゃる方々は2千年紀に生まれて、今3千年紀を生きておられる、たいへん稀有な人たちですが、年表を紀元1年で折りますと、私たちが生きる紀元後の3千年紀と表裏の関係になる紀元前3千年紀にシュメール人は生きたのです。ミレニアム問題が取りざたされた2001年、

3千年紀に入った年の年賀状に、シュメールを研究する私も、やっとシュメール人と同じ3千年紀を生きるようになったと書き、訝しがられました。100年単位である世紀の、その上に千年を単位とする千年紀という区切り方があるということを知っていただければと思います。

前3千年紀は、日本で言えば、弥生文化の前、縄文文化の時代です。農耕も文字も金属器も無い時代です。メソポタミアとに大きな時間差があることになります。そういう古い時代でありますし、遠い場所なのですが、シュメールが研究の対象になり得るのは、文字資料、楔形文字を記した粘土板が大量に残されているからです。19世紀に始まる発掘によって粘土板文書がぞくぞくと掘り出される。いまでは100万点あるという人もいます。多くは博物館に眠ったまま解読されるのを待っていますが、文字資料があることによって、当時の歴史と社会の研究が可能になるのです。

楔形文字はシュメール人が発明しました。楔形文字は紙やパピルスでなく、成形した粘土に書かれた。葦と言っていますけれども、日本で言えば細竹のようなものを切って、筆にして、柔らかい粘土に文字を刻みます。画面に映っている葦ペンで文字を書くのはシュメール人でなく、大英博物館の curator、ウォーカー氏が実演しています。ウォーカー氏は古い文書とかアッシリアの研究者ですから、書いているのはアッシリアの文字です。私だと、シュメールの文字を書くのですけれども。

シュメール・アッカドの都市の分布図を示しま

す。よく出てくる地名としてはニップルがありますが、ニップルは、シュメール地方とアッカド地方を区切る点線の真ん中あたりにあります。つぎに、簡単な年表を挙げます。ここで対象にする時代は、前2500年から2000年のあいだの500年であり、初期王朝時代、アッカド王朝時代、ウル第三王朝時代のあたりが話の中心になります。

演題を多神教の世界としました。シュメールにどれだけの神がいたのか。正確なところは分かりません。前2千年紀にバビロニアで編纂されたシュメール語の神のリスト、神名表があり、リトケが校訂した神名表では、約2000の神名が挙がっています (R. L. Litke, *A Reconstruction of the Assyro-Babylonian God-Lists*, New Haven 1998)。リトケより前、1950年に出版されたダイメル編纂の書物では、神名表だけでなく、行政経済文書や王碑文などの同時代史料からも神の名を採録しており、約4000の神名が集録されています (A. Deimel, *Pantheon Babylonicum*, Rom 1950)。神の数としてはこれらが一つの目安になると思います。

この講演では、多くの神々が存在するシュメール社会において神の理解がどのようであったかを示すために、神に関わる宇宙観、神殿、神像、神統譜について述べたいと思います。

本題に先立って、一つ指摘しておきたいことがあります。人類の歴史のなかで宗教や思想に大きな変革があったのが前1千年紀の後半とされています。年表では、アケメネス朝ペルシアあたりの時代でしょうか。この革新時代である前1千年紀を、ヤスパースという哲学者は、それ以後の世界がこの時期を軸に据え、迷えばこの時代に戻って、この時代を参考にしてものごとを考え直すという意味で、前1千年紀が人類における軸時代であるという言い方をしています。

ヤスパースが挙げる前1千年紀に登場する宗教、思想上の有名な人物は、イランのゾロアスター、インドの釈迦、中国の孔子と老子、ギリシャのプラトンとアリストテレスです。そして、

イスラエルでは前1千年紀の後半に一神教的性格を強めていきます。このように、現在につながる、もしくは現在の基礎となる宗教・哲学・倫理などの面で大きな進展が見られたのであり、前1千年紀とは人類史において一つの革新の時期なのです。

これから話題にする前3千年紀は、その軸時代より1000年から1500年古い時代です。いまの私たちの時代は前1千年紀を軸に発展してきた世界でありますから、それより前の時代である前3千年紀は、いまの世界とはまったく違う時代であろうことは、想像に難くありません。そうは言っても、19世紀的進化論の立場からシュメール時代の宗教を原始的な宗教、無意味なものと思えらるということではありません。逆であって、それぞれの時代には、それぞれの時代の社会や思想状況に応じた神の理解があったという立場から、シュメールの話をしします。

1. 宇宙観

天と地と地下

最初に、シュメールの宇宙観について述べます。彼らの宇宙観を見れば、神々を中心に据えて思考していたことが明らかになるからです。シュメール人が見ていた世界は、近代人が考える物理法則に支配された世界でなく、神話に裏打ちされた天なる神々の世界と地上の人間の世界から成るというものです。

天の世界は神々の世界でありまして、天を支配する神がアン神です。アンは、天の意味と神のアンの方の意味を持ちます。つまり、アン神は天そのものなのです。一方の地上世界は、人間が住む場所で、エンリル神が支配しています。人間にとって最高神として理解されるのは、神々の世界のアン神でなく、地上世界の支配者であるエンリルであり、エンリル神が最高神として崇拝されたのです。

シュメールの神話的宇宙論は、地上の人間世界



に対して、大地の下、地下に、アブズ（深淵）を置きます。地下には、さらに、冥界も置かれます。深淵は、人間にとっての生命の根源である水のあるところ、つまり生命の神秘を宿す場所と考えられました。深淵では、エンキ神が統治者です。

冥界は、深淵とは逆の、地上で生きた人間が死んで行く所であり、生の世界に対する反世界になります。冥界の主人はエレシュキガル神です。名前自体が、「冥界（キガル）の女主（エレシュ）」の意味です。ただし、冥界は、生前に犯した罪のために行く地獄ではなく、誰もが行かねばならない死後の世界です。前3千年紀には、煉獄や地獄の考え方はなく、当然、地獄に対比される天国もありません。彼らが考える至福の世界とは、神々の世界のことであり、まだ楽園の考え方も無かったのです。

冥界を描写するときに、生ある地上世界の逆の世界として描くことが多く見られます。たとえば、シュメール語で書かれた神話『イナンナ神の冥界下り』では冥界の住民を「食物を知らず、飲物を知らず、穀物の奉納を受けず、御酒を飲まない」と描きます。地上世界にあることの否定形、「知らず、受けず、飲まない」という否定形で、冥界を表現したのです。さらに、月本さんが訳された『ギルガメシュ叙事詩』のなかでは、冥界は、「そこに入った者が出ることのない家に、そこに踏み込んだら戻れない道に、そこに住む者が光を奪われる家に。そこでは塵が彼らの糧食、粘土が食物なのだ」とあります。塵が食料、粘土が食べ物と、これはもう地上の世界ではあり得ない。光のない冥界は、この人間世界とまったく逆の世界なのです。

シュメール人が考えた宇宙の全体をまとめますと、天と地の区分がまずあり、天が神々の世界であり、地が人間の世界です。人間世界においては、さらに、地上と地下という、人間が今という時代を生きるということに対して、誕生の前の時代に対応する深淵と、死後の世界である冥界が地下に

ありました。このように、シュメール人は、二項対立的な見方、つまり、相反するものを一組として捉える二分法によって世界を理解したのです。

それに対して、時代が下った前1千年紀のバビロニアの宇宙観は、少々異なります。バビロニアの人たちは、この宇宙を層の積み重ねとして見ています。天の一番上にはアンが坐す場所がある。その下が神々がいる場所である。下の天というのは星々が位置する層として理解したのです。天に対する地においても、地上は人が住む場所である。その下に深淵がある。アブズですね。そして一番下に冥界がある。つまり、位置関係が層を成していると理解していくわけです。

前3千年紀のシュメール人は、地下に置かれた深淵と冥界の、どちらが上にあるのかは全然考えていなかった。時代が下ったバビロニアにおいては、空間的な位置関係をはっきりさせたのです。層を成して、きれいなかたちで図示できるということは、逆に言えば、シュメール人が考えていた二項対立的な、つまり性格がまったく逆のものを組み合わせるという明確な性格付けが薄れてしまっています。位置関係で示すだけですから、その性質がどれだけ違うかは必要ないわけです。シュメール人が持っていた異質な世界の組み合わせという空間イメージが、だいぶ薄れていくのが、このバビロニアの時代なのです。

もう一つ言っておきたいのは、メソポタミア文明を見るとき、私たちはエジプトとメソポタミアの違いというかたちで話してしまう。他の文明との比較では、メソポタミアというのは、初めから最後まで同じ性格であり、特徴は一つだと考えがちですが、決してそうではないということです。3千年の長い歴史があるわけですから、その早期の時代と、バビロニアの前2千年紀とか前1千年紀では、当然ものの考え方も違ってきているだろうし、世界観も変わるだろうし、最初に言いましたヤスパースが言う枢軸時代を考えれば、それは紀元前の1千年紀後半ですから、当然そこでも大

大きく違ってきます。だから、メソポタミア文明とひとくくりにはできる特徴があると言えはるかもしれないけれども、あまり強調する必要はない。私たちは、時代の流れのなかでものごとの理解は変わっていくという、基本的な立場でものを見ていかなければならないのではないかということです。

神々の世界である天上世界と区別された地上の人間世界ですが、シュメール人は、この地上も、また二項対立的に理解しました。中心である文明地域と、その周辺に位置する非文明的な世界という明確な二分法によって、地上世界を理解したのです。文明地域は、シュメール語で *kalam* と呼ばれ、その外側に広がる *kur*、このシュメール語は本来的には「山」を意味しますが、その *kur* たる非文明地域が広がっていると見たのです。

文化を意味する英語の *culture* が、ラテン語の耕す、*culturr(a)* を語源とするように、シュメールでも文明・文化は当然、農耕を基礎に栄えると考えています。したがって、非文明的、野蛮であることは、農耕ができないということですね。荒蕪地のイメージで語られるのです。

kur は野蛮、非文明地域を意味しますが、先ほど述べました死者が行く場所、冥界を指す言葉でもあります。したがって、シュメール人は周辺地域を文明果つる地域と見るだけでなく、冥界からの連想で、死者の世界のイメージで見ていたこととなります。つまり、文明ある都市や地域を一步出て、山岳地帯なり、砂漠なり、原野に出て行くと、そこは、すぐさま冥界につながる場所なのです。都市を離れ一步原野に踏み出すと、人は悪霊におののき、悪魔祓いの呪文を唱えたということがあります。たいへん恐怖を持って見ている部分があるわけです。

さらに、文明＝農耕ですから、文明地域は水豊かな場所になるのですが、対になる非文明的な *kur*、野蛮な周辺地域は、乾燥した地域になります。これは冥界と深淵の区分にぴったり合いま

す。生命の泉がある深淵は水があふれています。対する冥界は、月本さんの訳にありますように、塵・粘土を食べており、乾燥世界のイメージで語られるのです。

シュメール人は、自分たちの文明世界が中心であり、その外側に野蛮な地域があるという二分法を、冥界と深淵という二つの世界からの類推、つまり生命の根源である深淵が中心文明だと考えれば、死者が行く冥界が周辺地域に対応するという類推をもって語るのです。

ただ問題なのは、いま言いましたクル、これは冥界だとか、周辺地域とか、価値のないものという意味になるかもしれませんが、この言葉が、いまの説明とは違う説明をしなければならない例があります。人間世界を統べる最高神エンリル神は「諸国の王 *lugal-kur-kur-ra*」と形容されるのです。イナンナ女神も「諸国の女主 *nin-kur-kur-ra*」を称しています。地上世界全域を、文明地域である *kalam* でなく、不毛な大地を指す *kur-kur* で呼ぶのです。これはなぜだろうかということですね。普通ならエンリルは地上の人間世界の最高神ですから、中心文明地域を指す *kalam* を使えばいいのに、なぜわざわざ *kur* という野蛮な地域というイメージを持つ用語を使うのかが問題になるのです。これについて人はあまり問題にしないのですが、やはり問題になると思います。

なぜ、文明の中心カラムでなく、野蛮を意味するクルで表現したのでしょうか。その理由を考えると、人間でなく、神の視点で見れば、納得できます。つまり、地上における中心と周辺の二分法でなく、天と地の二項対立の視点から見た用語なのです。不死なる神に代表されるように、完全・不滅である神々の天上世界に対して、地上世界は死すべき人間の不完全な世界であり、その不完全さをクルで表現したのです。

地上世界をこのように観念したとすれば、シュメール人にとっては、本来不毛で不完全なクルと理解される地上世界というものが、まず存在しま



す。そこになぜ文明地域ができあがるのかということですね。それはあくまでも神々が神の秩序をこの地上世界に植えつけてくれる。つまり神々の恩寵でもって、この地上世界に中心文明地域ができるのだ。逆に言えば、神々の恩寵なくして中心文明地域はできないのだという考え方になります。シュメール人は、神々が配慮することで豊穡が約束され、文明が育まれるという考え方を持っていたのです。

人間の創造

シュメール人は、神々に依存して、はじめて文化を享受する存在としての人間に成りえると考えました。したがって、周辺に住む蛮族は、人間ではないと言うことになります。周辺地域との差別化です。その一方で、神に依存することから、人間が生み出された、創造されたのは、神々に奉仕するためであるという、人間創造の神話が作られました。

シュメール語『人間の創造』

「天地の紐であるウズムアにおいて、あなた方は二人のラムガ神を殺して
彼らの血でもって人間を造るのです
(今まで) 神々が (になってきた) 仕事は
(今や) 彼ら (人間) の仕事でありますように」
(五味亨訳)

『エンキとニンマフ』

「神が台所で食事をつくり、
大いなる神々が仕事をなし、小さき神々がおけを運ぶ
神々が運河を掘り、その泥砂をハラリに積み上げた
神々が粉を挽き、その生活に不満を述べた。」
「我が子 (エンキ) よ、目覚めよ、
その知恵により聖なることをはたらかせよ
神々の仕事を引き継ぐ者を創り、彼らのおけを担わせよ」

「母なるナンムの言葉によってエンキは寝台から起き上がった。」

人間はどうしてつくられたのかというと、神の世界にも上位の神と下級の神がいて、下級の神が一所懸命各種の労働に従事し、食事を作ったり、掃除をしたりしていたのです。その神々が、もうこんなことは嫌だとストライキを起こした。それに対して、神々がいままで担ってきた仕事を引き継ぐ者として人間がつくられたというのが、シュメールにおける人間創造の神話なのです。

人間は、神々の苦役である仕事を肩代わりするためにつくられたのですから、人間という存在は、神々に奉仕し、労働する者と規定されるのです。それに対応するように、シュメール語の「正しい si-sa₂」の本来の意味は、「神々への供物を、規則通りに滞りなく行うこと」でありました。

私たちが考える「正しい」こと、つまり、人間関係のなかで行いが正しいとか、相手に悪をなさないことを正しいとするという、人倫関係における正しいという意味に使うようになるのは、前3千年紀も末近くです。「正しい」を意味する si-sa₂ に抽象名詞を造る言葉 nig₂ を付けて nig₂-si-sa₂ を造語して、社会正義、つまり、私たちの人倫関係における正しさという意味に特化して使いたしたのは、ウル第三王朝時代直前なのです。3千年紀も最後の時期になってはじめて、本来的には神々に奉仕することを正しいおこないと理解していたのに加えて、二次的に、人間同士の関係のなかでの正しいおこないという意識が生まれ、言葉が生まれたのです。

ウル第三王朝時代になって、人間社会における正しさ、社会正義を保持することが王の責務、義務に加わります。本来、王は何をするかということ、神々を祀ることが中心だった。それを滞りなくおこなうことが王にとっての正しいことだったのですが、ウル第三王朝の王にとって、人間社会の正しさ、秩序を守ることも王の責務になったの

です。そのことを反映して、この時期に初めて『法典』が生まれたのです。『ハンムラビ法典』が有名ですが、この『ハンムラビ法典』は、ウル第三王朝の『ウルナンム法典』、次のイシン王朝の『リピトイシュタル法典』を継承して生まれたのであり、ウル第三王朝以来の伝統の中で『ハンムラビ法典』はつくられたのです。

自然の理解

人間の存在理由を神々への奉仕に求めるシュメール人の人間観は、現代人とは相当異なっていますが、自然観も現代人と違っています。シュメール人が考える地上世界と地下の深淵と冥界のあり方は、人生という人間の誕生から死へという一連の時間的系列を、空間的な配置に置き換えたものです。彼らの世界は神話の秩序の空間的配置であって、私たちが理解する物理的な世界の再構成というものとはまったく異なるのです。

私たちには、人間が制御し、利用し得る自然という考え方がありますが、シュメール人は当然そういう考え方は持っていません。彼らが対峙するのは、この世界をつくった神々であって、自然一般ではないのです。では何を意識していたのかというと、自然・環境が、神の恩寵でもって豊穡が約束されるのか。それとも神が見捨てた、人間にとって無価値な不毛なものなのか。この価値観によって自然を見たのです。神と人間が対峙しているのであって、人間は自然と対峙してはいません。あくまでも神がわれわれに豊穡をもたらしてくれる。それがいい自然なのですね。自然という言葉はないわけですが。それに対して、神々が見捨ててしまうところは不毛であって、人間にとって何の価値もない。こういう見方をしていたのです。

シュメール人にとっての豊穡のイメージは、ナツメヤシに代表されます。ナツメヤシの林は自生・天然でなく、人工的に植えて、的確な管理が施されました。『ハンムラビ法典』に、ナツメヤシの林に関わる条文があります。それほどに大事

だったのです。

ニップルはシュメールの主要都市でありましたが、現在その遺跡は荒涼とした砂漠の中にあります。人間が自然に対して無理強いしたことで、水平線の向こうまで砂漠という、もはや人間が住めない場所になってしまったのです。まったく水がなくて使いものにならない大地。これが不毛の荒地です。

シュメール人が考える自然とは、神々の恩寵によって豊穡を約束された地か、それとも神々が見捨てた荒地、人間に対して害をなす荒ぶるものかという対比であって、近代人のように自然としてひとくくりに理解することはなかったのです。神との関係で自らを見ていたということです。いま私たちは、自然という環境のなかで生きているという軸を持っているわけですが、シュメール人には、この軸はないということです。軸が違うのです。

豊穡を約束してくれるのは神でありますから、人はその文明の最初から神を祀ったのです。その際、食糧生産に依存する社会では、農業儀礼が中心になるのは当然の理です。古今東西、祭の中心に豊饒儀礼的な農業祭があるのは、こうした理由に拠るのです。シュメールにおいて、豊饒儀礼を記したものに「ウルクの大杯」があります。たいへん古いものとされ、前3千年紀でなく、前4千年紀という、もう一つ前の時代のものです。最上段の右側に立つのが王です。ただし、この部分は破損しており、想像的に復元されており、そう描いてあったかどうかはわからないのですが、一応そうしておこうということです。

「ウルクの大杯」に描かれた豊饒儀礼の主人公は、王に向かって立つ女神です。ウルク出土の大杯ですから、ウルクの都市神イナンナが描かれています。女神の後ろにアシの束で、飾りのようなものが上から垂れ下がっているのが2本立っています。これがイナンナ神の象徴であり、この意匠がイナンナ神を示す文字になります。



2. 神殿

話を、第二の話題、神殿に移します。天上世界に住むとされている神々も地上に神殿を持っており、シュメール語では神殿も、王宮も、個人の家も、すべて同じ言葉 e_2 で表現します。神殿を指す特別の言葉は無いのです。神の家と書いてあって、それが神殿になるのです。つまり、人間が家族を持ち、居住すべき家を持つと同様に、神々も家族と家を持つと考えられていたのです。

神殿が神の家であったことは、神殿建立を題材にしたラガシュの支配者グデアの神殿讃歌から明らかになります。グデア像 Statue B では、膝のところに神殿の設計図が彫られています。都市神ニンギルスの神殿を建てたことを誇示する銘文がこの像には刻まれています。裏を見るとびっくりするのですが、裏全面にくまなく文字が書いてあります。

こんな話をしていると時間がないかもしれませんが、グデアが、都市神ニンギルスのために神殿を建てたとき、それを記念して、粘土を円筒形に成形し、それも2本つくって、長文の神殿讃歌を書き留めました。グデアがなぜ神殿を建てたかを1本目に書き、竣工なった神殿に神が喜んで入ったかということを書き留めたのです。この神殿讃歌が、シュメール文学の最初だとされています。つまりグデアの時代に、ある程度長大な文章が書けるようになったことで、次のウル第三王朝時代にシュメール文学のいろいろなジャンルが生み出されたと考えられているのです。

グデア像 Statue B には、2本の円筒に書かれた長大な神殿讃歌のダイジェスト版が書かれています。ダイジェスト版でも背中全体に書かなければならないほど長いのですが、長文を読むのが嫌だったら、このグデア像 Statue B を読めばいいということになりますね。

ここでは、2本の円筒に書かれた神殿讃歌を使いますが、グデアが都市神ニンギルスの主神殿を

建て、完成した神殿にニンギルス神を迎えたとき、ニンギルス神に続いて、多くの神をニンギルス神殿に迎え入れました。最初が、ニンギルス神の妻バウ神と、子とされる2神です。神々も親子の2世代からなる家族を持つとされていたのです。そのあとに、神殿での職務を果たす諸神が入りました。神殿の主人ニンギルス神はシュメールの最高神エンリルの勇士とされる戦闘の神ですが、その勇士たるニンギルス神を補佐する将軍の2神がまず入り、その後、供物を整える神、伝奏者たる神、理髪師たる神、ロバの牧夫たる神、山羊の牧夫たる神、聖歌僧たる神、琴楽士たる神、女官たる神、耕地検地人たる神、川管理人たる神、グエディンナの管理人たる神が続き、最後が、聖域を警護する神であります。

グデアの神殿讃歌から、シュメールにおける神殿とは、家族と従神から構成されており、従神が果たす役割から、耕地や家畜を有する家産的経営体（家政機関）と見なされていたことが理解できるのです。つまり、神殿というのは祭の場所という意味ではなくて、本来的に言えば、神の家なのということ、王が王宮を持つように、われわれの家を持つように、神殿というのは本来、神がそこで生活するための基盤としての家なのです。そして、人間が土地とかいろいろなものを持つことと同じように、神殿も、耕地や家畜というものを所有する。そういう家産的経営体、家政機関であったのです。

3. 神像

神殿には当然神像があったはずですが。前2400年頃にラガシュにウルナンシェという王が出て、6代を数えるウルナンシェ朝の祖となります。このウルナンシェは神殿を建立するとともに、そこに納めるべき神像をたくさんつくっています。

ものをつくるという場合、シュメール語では dim_2 という言葉を使います。あとの時代では像を造ることを dim_2 で表現しますが、なぜか初期

王朝時代では、神の像は必ず「産む (tu)」と書きます。人間が子どもを産むという、その言葉を使って、神像をつくることを表現したのです。

表現上注目されるのは、「産む」だけではありません。私はいま神像と言いましたが、シュメール人は、神について、像、シュメール語の alan を使わないのです。例えば、ニンマルキという神であれば、「ニンマルキを産んだ」と固有名詞だけを書き、ニンマルキの「像」をつくったとは書かないのです。像 alan は、人間の、王の像とか王妃の像という場合は必ず付きますが、神については、「像」を使わないのです。シュメール人にとって、神像は神像ではないのです。神そのものだと意識されていたのです。

不思議なことながら、神殿に置かれてあったはずの神像が、考古学的発掘によってほとんど見つかりません。王の彫像が多く残されるのに対して、神々の像は、重要な神ほど残っていないのです。最高神エンリルの像をあれこれ探したとしても、見つからないはずです。残っていないからです。円筒印章などでは、神を人の形に表現しています。神人同形ですね。そうした神像がなぜ、残っていないのが問題になります。

人間の形をした神像が、神殿の中心のところに安置されていたのか、それとも単なるシンボルとして何か置いてあっただけなのか。これが問題になります。仏像のように人間の形をしたものが置いてあったと考えることもできるし、何かシンボリックなものがそこに飾ってあったと考えることもできる。しかし、現在、発掘では何も得られないのですから、どちらの説にしても、充分な説得力を持っていません。

ただ、ウルナンシェ王が記すように、神像がつくられたことは確かです。神の像が何によって造られたかは、文字史料から知ることが出来ます。シュメール語論争詩の一つ、『タマリスクとナツメヤシの論争』のなかに関連する文章があります。

「タマリスクが語りはじめた。ナツメヤシに言う。

私の身体は、神々の身体になる。

おまえ (ナツメヤシ) は果実を成らすが、(それらは) (神像である) 我が前に置かれる。

女奴隷がその女主人の前にぬかずくように。」

タマリスクが、ナツメヤシより上位にあることを主張する場面ですが、神像はタマリスクで造られたことが理解されます。これに対して、ナツメヤシが返答する場面では、

「怒って、ナツメヤシは答える。彼の兄弟タマリスクに言う。――

おまえは確かに神々の聖堂において神々の身体であろう。

神々の至聖所で良き名が唱えられる。

しかし、神々の肌はそれぞれ銀で (覆われ、タマリスクではない)。」

と、神像の芯はタマリスクであろうが、表面は銀で覆われている、すなわち、タマリスクは内側に隠れて見えないではないか、誰も気が付かないだろうということ、タマリスクをおとしめています。

この論争詩では、神像の本体はタマリスクで造られ、表面を銀で覆ったのが通常の神像とされています。シュメールにおける神像の一般的イメージと考えてよいと思われます。

神像でなく、王の像として、王碑文が強調するのは、タマリスクでなく、青銅製であり石製です。初期王朝時代では、マガンなどの遠隔地から運ばれてきた閃緑岩であることが強調されています。ウル第三王朝時代直前のラガシュの王グデアは、自らの像を造ったとき、「像よ、汝は銀でもラピスラズリでもない。銅でも亜鉛でもない。誰も造れなかった閃緑岩である」と呼びかけています。閃緑岩は輸入された貴重品であることと、金銅製よりも、大きな像が造りやすかったために好



まれたと思われます。王の像と神像の材質の差が、本当に意識されていたのかどうか、これも今後の課題として残された問題になります。

神の不可侵性

神像の続きですけれども、前1千年紀、アッシリアが占領した都市から神像を奪って、都であるアッシュルに運び出す図があります。前1千年紀という時代においては、占領した都市の神殿や神像を破壊したり、運び去ったりする。つまり、神像や神殿に手をかけるということを、王は何ら悪いことだとは思っていないのです。

ところが、前3千年紀のシュメールではそうではない。前3千年紀のシュメールでは、決して神像を略奪したとか神殿を破壊したということを、王の業績としては書かないのです。シュメール人にとって、神殿と、そこに安置されていたであろう神像は神聖にして不可侵であったのです。

今言ったことと一見矛盾する碑文があります。エンシャクシュアンナの碑文に、「その（征服したキシュにあった）像とその銀とラピスラズリと財宝たる木製品を、エンリル神のために、ニップルにおいて奉納した」とあることです。

ここに書かれてある像とは、一見、神像と読めます。神像に手をかけないということ、手をかけることは誇りにならないはずなのに、なぜ書くのかということが問題になります。

別の碑文にも神像を奪ったと読めるものがあります。ウルカギナの王碑文です。隣国ウンマの支配者ルガルザゲシの攻撃を受けたとき、「ガトゥムドゥ神殿に火が放たれた。その銀とラピスラズリが略奪された。その像が破壊された」のように、約20の神殿毎に、放火、略奪、像の破壊を繰り返し描いています。ここでも、神像が破壊され、奪われたと読めそうです。

神殿の破壊でなくて、像が破壊されたという、この像とは何なのかを、まず取り上げます。神殿から奪ったのですから神像かなと普通は思いま

す。ほとんどの人たちはそう考えていると思いますが、決してそうではありません。

先ほど言いましたように、神については「像」という言葉を使わない。神の固有名詞を挙げるだけです。エンシャクシュアンナ碑文とウルカギナ碑文では、全部、像 alan とあります。とすれば、破壊され、略奪されたのは人間の像なのです。

例えば、ウルカギナと同時期のラガシュにおいて、王妃が国内のいろいろな神殿を巡って、そこに奉納物を奉げていくという記録があるのですが、当然、神は名前だけで示されます。ナンシェとか、神の名前だけです。それに対して、人間の場合、つまり神殿のなかに、例えば、エンメテナという王の像があったとすれば、それは alan、像ですね、エンメテナの像 (alan en-me-te-na) と書きます。像 alan という言葉を入れて表記しています。このように、神像を表現する場合と、人間の像を表現する場合と、明確に区別されていました。したがって、破壊され、略奪された像とは、像とある限り、人間の彫像なのです。

神殿の内陣の図を示します。部屋の右側とか、左側とか、壁側にいろいろな像が立っています。王たちの祈願像です。神に祈る像が多く造られ、神殿に納められていたのです。これらが破壊・略奪の対象になった像なのです。奥に収まった神像が人間の形に描いてありますが、先ほど言いましたように、ほんとうかどうかはよくわかりません。残っていないのですから。

もう一つ、神殿の問題ですが、先ほど言いましたように、3千年紀のシュメール人の王たちは、決して神殿を破壊するとか、神像を穢すという言い方をしないのですが、エンシャクシュアンナという王は、キシュを破って、キシュの神殿を略奪し、宝物をエンリル神に奉納したことを、王の功業として書いています。エンシャクシュアンナからシュメールの世界は時代が変わるのです。それまでが都市国家時代です。このエンシャクシュアンナから領域国家時代となって、シュメール全土

を一人の王が支配できる時代に入るので。

どういうことかという、エンシヤクシュアンナは最高神エンリルから地上の支配権を与えられたのです。支配権を与えられたエンシヤクシュアンナに対して反抗する者が出てくるとすれば、この者はエンリル神の権威を汚す者であるわけですね。エンリル神がこうであると決めた秩序に反抗するのですから、エンリル神に対して反意を持ったこととなります。その反逆する者を打ち破っても、またその都市を破っても、それは罪にはならない。むしろエンリル神の秩序を守ることににおいては、王の積極的な義務になったのです。事実、エンシヤクシュアンナは、キシユを征服したとき、それは「神々の命令によって」為したとことわっています。ここに、都市国家分立時代と、統一国家時代の違いがあります。エンシヤクシュアンナ以降、都市破壊の記述が頻繁に出るようになるのです。

それ以前、都市国家時代において、都市の破壊記事がまったくないかという、そうではありません。シュメール人は中心と周辺の区別を持っており、中心の地域、つまり自分たちと同じ文明地域にある都市、例えばウルクとか、ラガシュとかのシュメールの諸都市については、それを破壊したという言葉は絶対に使いません。しかし周辺地域、蛮族が住むエラムを征服するときは、これは文明地域ではありませんから、当然破壊していいわけです。中心と周辺との2分法によって、明らかに周辺を下位に見たのです。都市破壊はいくらでも書けるわけです。それが、統一国家期になると、都市破壊ということが中心地域についても言えるようになったのです。

だからと言って、神の像を、神をないがしろにするということにはなりません。都市を破壊したということはあってもですね。

ちょっと言い忘れましたけれども、都市国家分立時代には、当然ラガシュとウルクとか、都市国家間で戦争をしています。相手の都市に攻め込ん

で壊すこともあったでしょう。それをどう表現したかという、相手の王とその兵士を武器で打ち倒したという、常套句的な表現しか使わないのです。別に、ラガシュの王がウンマの王を「ウンマ市内まで追って、殺した」という記事がありますが、ここでも相手の王が対象であって、都市と都市神に言及することはないのです。

前3千年紀において、領域国家期以降に、都市の破壊までは認めるようになったのですが、神殿や神の像を何とかするなどという話は書かない。エンシヤクシュアンナもキシユという都市の征服を明示しますが、神殿の破壊は明示していません。それは罪の最たるものであるという理解があったのです。

そうすると逆に、先ほど挙げましたウルカギナの碑文ですね。これは相手の王、ルガルザゲシが、神殿に放火し、像を破壊してまったのだと非難しています。私たちは、諸神殿が破壊された事実を逐一書いたのだと理解しますが、当時の人はそうではないということです。タブーの最たる神殿や神像の破壊を、ルガルザゲシが臆面もなくやってのけたことで、いかにルガルザゲシが神を恐れぬ非道な王であるかという、強烈なイメージを持ったはずですね。してはいけないことを20個ぐらい並べているわけですから。

例えば、私は碑文を読んで、カードに整理し、この神殿名は前にどこに出てきたかなという、事実として読みますけれども、当時の人が、この碑文を読めば、ルガルザゲシはおぞましい王であるというイメージをもったはずですね。それがこの碑文を造らせたウルカギナの意図なのでしょう。私自身は、このように考えております。

祭

先に、シュメール人が神を祀ることの中心に豊穡祭があるのだらうという話をしました。シュメール人は、12カ月を、ほとんどの場合、その月にどういう祭をするかということで名前を付け



ました。たとえば、ウル第三王朝時代のウンマという都市では、1月「収穫の（祭の）月」、2月「煉瓦を煉瓦型に置く（祭の）月」、3月「（収穫）穀物をカルに置く（祭の）月」、4月「初穂の祝いの（祭の）月」、5月「RIの（祭の）月」、6月「播種の（祭の）月」のような月名になっており、当該月に実施される祭をその月の名としています。このようにして、それぞれの月におこなわれる祭、伝統的に決まっている祭を、毎年繰り返しておこなったのです。

ウンマの暦で、1月が収穫の祭の月、6月が播種の祭の月であるように、農時暦に合わせた祭が重要視されています。どんどとか、秋祭とか、虫送りとか、私の小さいころには必ずそういうものがありましたけれども、そういう農事に関する祭が一つです。シュメールの祭のなかで大きなものは、いま言いました農業祭と、ここには出てきませんし、今日は話をしませんが、死者のための祭がありました。死者をどう祀るかというのが大きな意味を持っていたと思います。

1年のサイクルで繰り返される祭の他に、月の満ち欠けに応じた月毎に繰り返す祭がありました。この二つが明確に区別され実行されたのです。月が欠けて、また満ちていく。そこには豊穰のイメージがあります。だから、豊穰祭というものは、この月の満ち欠けに基づいた、月を単位とした祭のなかに、たいへん色濃くあらわれます。そこで主人公になってくるのが、イナンナ女神です。ウル第三王朝時代になりますと、イナンナは豊穣神的なイメージを強く持ってきて、月の祭において豊穣を司る神として重要な役割を演じるようになります。

前3千年紀末期のウル第三王朝時代は、メソポタミアが統一された時期であります。ウンマやラガシュというシュメールの諸都市は、ウル第三王朝の支配に服したとしても、暦はそれぞれの都市によって違います。支配都市ウルの祭を強制されることなく、月名に沿って、それぞれの都市の

伝統に即した祭を行っていたのです。それがこの時期の祭の特徴であり、都市の自立性が浮き彫りになります。都市の自立性、私はそれを、都市国家的伝統と呼んでいます。シュメールの神々を考えるときの重要な要素になります。

4. 神統譜

シュメールの七大神

冒頭で述べましたように、シュメールには数千の神がいました。なかでも重要な神として、7神が別格の扱いを受けました。シュメールの文学作品には運命を定める7神がよく出てきます。アン、エンリル、エンキ、ナンナ、ウトゥ、イナンナ、ニンフルサグの7神です。

シュメールの神の特徴を大ざっぱに言えば、月の神ナンナと、太陽神ウトゥの地位が相対的に低いことです。エジプトでもヒッタイトでも、太陽神が主神の地位を占めています。しかし、前3千年紀のシュメールでは、太陽神は、最高神になることはありません。

月の神、シュメールではナンナともシンとも呼ばれますが、この月の神の地位も基本的に高くないのです。先ほど言いましたように、月の満ち欠けに準じた月例祭ということから考えても、ナンナ神の地位はもっと高くてもいいのではないかと思います。月の神ナンナの地位が高くなっていくのは、ウル第三王朝時代に、ナンナが都市神であるウルが王都になったときからです。それまでは他の神とほとんど変わらない。シュメールのなかで一番大きな神は何かと言うと、エンリル、イナンナ、エンキなのです。

一般論として、太陽神や月神など、天体や自然現象を神とするなかで、何が中心になるのかは、ある程度神話学的にパターン化されると思いますが、シュメールの場合はそれから逸脱しています。

最高神エンリルは、何の神かよくわかっていません。エンリルという神名は「リルの主」と解釈できます。リルは、「風」や「風魔」と訳される

場合がありますが、そうではないという人もいます。名は体を表すと言いますが、名の意味が分からないのですから、エンリル神の性格は皆目分かっていないのです。そうしたエンリルが最高神になっているのです。

シュメールの神々を特徴付けるもう一つが、中央パンテオンの7大神にしても、都市神の性格を維持し続けることです。アンと言えばウルク、エンリルと言えばニップル、エンキと言えばエリドゥのように、それぞれの都市の主神、都市神であるということが最後の最後まで抜けないのです。だから絶対神になることはないのです。そこに、前1千年紀における宗教観と、それ以前のメソポタミアの宗教観の違いがあります。それ以前では、最高神アッシュルと言っても、アッシールの都市神であり続けます。バビロンのマルドゥクは、最高神と言われますけれども、あくまでもバビロンのマルドゥクであって、バビロンの都市神という性格は最後まで抜けないのです。

神々が持つ中央神と都市神との二重性は、ときに軋轢を産みます。相互の矛盾に逢着したことが、ウル第三王朝の滅亡を主題にした『シュメールとウル滅亡哀歌』に表現されています。この哀歌では、ウルは滅亡すべしという決定を下す大神たちが、まず登場します。

「アン、エンリル、エンキ、ニンフルサグは
(ウル滅亡の) 運命を定めた、

その運命は変えられない、誰も破れない。

アンとエンリルの命令を誰が覆せようか。

(神々の王) アンはシュメール人の住むところを荒々しく扱い、人々は恐怖に打ちひしがれた。

(統治を司る神) エンリルは日々を苦きに変え、町は言葉なく沈黙に包まれる。

(豊饒・生殖の女神) ニントウ(ニンフルサグ)は国土において女の部屋に門をした。

(水の神) エンキはティグリス・ユーフラテ

ス川の水を干上げてしまった。

(正義の神) ウトゥは正義と真実を(人々の)口から消し去った。

(戦闘の女神) イナンナは蛮族に戦闘の力を与えた。」

アン、エンリル、ニンフルサグなど、中央パンテオンにおいて運命を定める神々が、各々の権能に従って、シュメールを破滅に追い込むのです。

ところが、神々が都市を見捨てる記述の部分になると、ウル滅亡の運命を決めた神々も、エンリル神はニップルを、エンキ神はエリドゥを、ニンフルサグ神はアダブを見捨て、嘆く側に回ります。つまり、中央パンテオンの神としてはシュメールの破壊を決定し、都市の主神としては愛する都市の破壊を坐視し、嘆く側に役割を演じ別けているのです。自分で滅ぼしておいて、何をいまさらと言いたくなるぐらいの、そういう矛盾を矛盾と感じないのがシュメール人だということです。中央神としての性格と都市神としての性格を、矛盾なく両方持っている、シュメール人は考えていたのです。このようにして、7大神、中央パンテオンを形成する神も、都市神であるという性格が、都市国家分立期だけでなく、メソポタミアの統一が果たされた領域国家期や統一国家期になっても維持されるところに、シュメールの神の面白さがあるのです。

神統譜

予定している最後の話題、神統譜に関わる話題に入ります。シュメールの7大神をはじめ、ラガシュの都市神ニンギルスは既に何度か言及しましたが、それら神々相互の続柄は、よく分かっていません。シュメールの神統譜は統一性がなく、不明確なのです。たとえば、イナンナは、アンの子とも、ナンナの子ともされます。主要な神であるアン、エンリル、エンキ、ニンフルサグ相互の系譜上の関係は不明なままです。つまり、主要な神



のそれぞれが、一人神として、他の神々と同等な立場で並んでいたのです。神統譜が整備されないのは、都市国家分立期においては、シュメールの主要な都市国家が併存する政治状況と、統一国家期になっても、シュメール諸都市は都市国家的伝統を保持していたことの反映なのです。前3千年紀の末にはウル第三王朝という統一国家ができて、それがハンムラビ時代までつながるのですが、従来言われているような中央集権国家では決してなくて、あくまでも都市の都市国家的伝統というものを承認しつつ、その上にちょっと乗っかるだけの王権であったと。そういう状態が神統譜形成の遅れに反映していると思っています。

神統譜形成が遅れる別の要因としては、この宇宙が、例えばアンは神々の世界を司るもの、エンリルは地上世界を司るもの、エンキは深淵を司るものであるように、それぞれの世界の中心として独立してあるということと、それぞれが都市国家の都市神であるということ、そういう神々の併存関係が最後まではたらい、7大神のなかでのそれぞれの関係を明確にするという意識が薄かったということが挙げられます。

神統譜が確定しないことに、シュメールの政治が関与しています。先ほどから言っていますけれども、政治にかかわるということから見れば、ナンナ神ですね。月の神ナンナというのは、地位がそう高い神ではありませんでしたが、ウル第三王朝になると急に高くなります。この時代、ウルに都を置きますから、その都市神であるナンナの地位が上がるのです。ナンナ神は、最高神エンリルの長子である、つまり、後継者であると位置付けて最高神の地位に昇ることになるのです。次いで、太陽神ウトゥと金星神イナンナは、ナンナ神の子になってしまいます。ここには従来の神々の関係ではなくて、政治的な意図、ウルがたいへん強力になったという、それを背景にして神統譜をつくり変えるという意図がはたらいたと考えられます。

別の事例として、ウル第三王朝時代より前、「国土の王」を名乗ってシュメールの統一を図るウルクの王ルガルザゲシが、アン神をエンリル神の父として描き、エンリルの願いを聞き入れる神と位置付けています。ルガルザゲシが本拠とするウルクの神アンを、最高神エンリルより上位に置く意図があったと思われますが、それは成功しなかったようです。

7大神ではありませんが、ラガシュの都市神ニンギルスの系譜も変化があります。この神は、初期王朝時代であれば、エンキ神の子とされていました。ところがウル第三王朝になると、エンリルの子になってしまう。このように神統譜というのは当時から何らかのかたちで、いろいろな政治情勢とか、人間の側の都合によって、ある程度変わり得るものとして意識されていたと見ております。

5. イナンナ神と聖婚儀礼

講演の最後に聖婚儀礼について述べたいと思います。ウル第三王朝は統一国家であり、諸都市が伝統にしたがって行う祭儀とはべつに、王は、支配領域全体を対象にした王朝祭儀、もしくは国家祭儀とも言うべき宗教儀礼を行う特権を持っていました。その一つがニップルに神殿がある最高神エンリルと中央パンテオンの神々を祭ることです。

ウル第三王朝の初代ウルナムが、そのニップルをはじめとして、エリドゥ、ウル、ウルクの計4都市にジグラト（聖塔）を建設したのも、4都市の都市神、7大神にも数えられるエンリル、エンキ、ナンナ、イナンナの祭儀権を王が掌握したことを示すものだと考えられます。

ジグラト（聖塔）とは、大きな土台をまず置いて、少し小さい基台をその上に築いていって階段状に建てられた塔です。一番大きいのはバビロンに建てられた、マルドゥク神のためのエテメンアンキ（「天と地の基台」）と命名された塔、バベルの塔ですね。7層あったと言われていたか

ら、たいへん大きなものですが、ジググラトの最初がウル第三王朝なのです。のちの王はそれを真似て、いろいろな都市にジググラトを建てていくということになったのです。

ウル第三王朝の国家祭儀として、エンリル神の祭儀権とは別に、聖婚儀礼が第4代の王シュシン治世から始まります。聖婚儀礼とは、新年になった時に行われるドゥムジ神の役を果たす王とイナンナ神との婚礼儀式であり、豊饒・多産を祈り、豊かな国土と平安な日々を保証するものです。イナンナ神の属性としては、初期王朝時代以来、戦闘の神が強調されていたのですが、ウル第三王朝ころから豊饒の女神の属性が強調されるようになったのです。

この説明は、従来の説と異なります。従来の説では、聖婚儀礼は、「ウルクの大杯」にありますように、前4千年紀という古い時期から存在していたとされるのですが、私は、開始時期を、一挙にウル第三王朝時代にまで下げたいと考えています。

新年の豊饒儀礼が、前4千年紀という古い時代から行われていたことは当然です。しかし、その形態は、通常、それぞれの都市において、例えばラガシュだと、ニンギルスとパウという都市神と配偶神の結婚という形式で行われていたものであり、すべての都市が共通してイナンナ神とドゥムジ神の結婚儀式を行っていたわけではありません。

イナンナとドゥムジの結婚儀礼というのは、ウル第三王朝という統一王朝の王が国家祭儀としておこなうということに意味があるのです。従来の説の問題点は、特殊な形態である聖婚儀礼が古い時代からあるという考え方であり、都市国家的伝統の中で行われる一般的な豊饒儀礼と、国家祭儀との区別がついていないことです。

初期王朝時代	ウル第三王朝時代
神々の婚礼	聖婚
都市神と配偶神	イナンナ神とドゥムジ神
都市国家の祭儀	王朝・国家祭儀

困ったことに、聖婚儀礼がウル第三王朝時代に始まるとする説に反する資料があります。初期王朝時代ラガシュの王ウルナンシェの一つの碑文です。この碑文の存在は、聖婚儀礼の問題だけでなく、私が考えている幾つかの点でも、それを覆してしまふ、たいへん厄介な碑文なのです。それについてお話しします。

問題になるのはウルナンシェの50番とされる王碑文です。銘文には、ウルナンシェがイブガル神殿 (ib-gal) を建てた、とあります。この碑文は、どの神のためにイブガル神殿を建てたかは書いていませんが、ラガシュのイブガル神殿は、イナンナ女神の神殿として有名です。碑文の側面に女神の姿が描かれていますので、これがイナンナ神であると考えられます。この女神の描き方が問題なのです。何かこう豊満で、いろいろなものを手に持って、どう見ても豊饒神に描かれているからです。

イナンナ神とドゥムジの聖婚儀礼が、ウル第三王朝時代に国家祭儀として確立したと言いました。それ以前のイナンナ神は、愛と戦闘の女神という言い方をするのですが、シュメールにとって、イナンナというのは戦闘の女神としてのイメージがたいへん強い。そして、性愛がイコール豊穡であるということにはならないのです。豊穡神は、シュメールの場合、大地母神の系譜に属するニンフルサグが該当します。イナンナというのは、基本的には戦闘の神として王たちにたいへんもてはやされていたのであり、初期王朝時代においてイナンナ神には、豊穡神の性格は持っていません。このように考えるのですが、この考えに真っ向から反対するのが、ウルナンシェの碑文なのです。

ウルナンシェの碑文があることによって、成立しなくなる私の考えとは、以下の4点です。

(1) イナンナ神を主人公にする聖婚儀礼はウル第三王朝時代からであり、それ以前のイナンナ神は、戦闘の神と考えられていた。つまり、イナン



ナ神の豊饒の側面は、初期王朝時代には重視されていなかった。

(2) イナンナ神がウルクからラガシュに将来されたのは、ウルナンシェの孫エアンナトゥム治世以降である。

(3) したがって、ラガシュのイブガル神殿は、ウルナンシェ時期には、未だイナンナ神殿ではなく、ドゥムジ神系統の神殿として存在した。

(4) 王妃と王の間に性差に基づく役割分担があり、王の専権事項である神殿造営を記念するウルナンシェの飾り板には、王妃・王女などの女性は登場しない。

この4点です。(1)は、今まで述べてきたことです。(2)と(3)については詳細を省いて、(4)について少し説明します。

ウルナンシェは、王の専権事項である神殿建立を祝い飾り板を残していますが、そこでは、王子を描きますが、王妃や王女を描くことがまったくありません。ウルナンシェより少し前になると思いますが、ウルのスタンダードが造られています。そこでも妃は勿論、一人として女性が登場しません。ウルのスタンダードが、王が持つ2大権限、もしくは2大義務である豊穡を維持することと戦争に勝つことを描いたためです。ウルのスタンダードでは、戦争勝利はともかく、豊饒の祝いの場面でも、妃はもちろん女性が一人も描かれないのです。王と男性の高官たちだけが杯をかざしています。王と妃には、性差による明確な役割分担があり、それを基準に描かれるのです。

さて、あのウルナンシェの碑文がある限り、私の説のことごとくが、成り立たなくなります。どのように否定されるかという点、

碑文はイブガル神殿の造営を記念して造られたが、王妃と王女が描かれている。(4の否定)。女神の像が描かれており、イナンナ神と考えられる。ウルナンシェ時期にイナンナ神を祭ったことの証拠になり(2の否定)、イブガル神殿がイナンナの神殿であることになる(3の否定)。女神

は豊饒神の姿に描かれている(1の否定)。

このように、すべてが否定されるのですから、私にとって厄介な碑文となっています。碑文と私の説は両立しないのですから、どちらかが間違っていることとなります。では、この碑文をどう処理するかという問題です。どうすると思いますか。このウルナンシェの碑文は贋作だということです。

贋作ということから言えば、有名な贋作は、十字形碑文です。カッシト時代の碑文なのですが、どう見ても文字はアッカド王朝時代、つまり紀元前2200年ごろの文字を使って書いています。そして内容も、アッカド王朝のシャルカリシャリの名前が出てくる。つまり、アッカドの王が、シッバル市のシャマシュ神殿、太陽神殿に、広大な領地を安堵し、不輸不入の権利を与えたことを保証するものです。十字形碑文は当然贋作です。アッカド時代には、神殿独自の所領に不輸不入の権利を与えるなどという考え方はまだないのですから、こうした碑文はあり得ない。アッカド王朝時代から1千年近く経って、神殿領を王権から守るため、跋扈する部族から守るために、十字形碑文という偽の文書をつくったのです。贋作は必ずあります。当時もあったし、現代の贋作もあるわけです。それがまず前提にあります。

この碑文を贋作と考える根拠を三つ挙げます。

(1) 文字を何処に書くかの問題。この碑文では、文字は人物像の中に書いてあり、人と人のあいだには何も書かないで空白になっている。一方、この時期の他の碑文では、人物像の外側の広い面に文字を書き入れています。人物像の中には、人物名、王子の誰々とか、固有名詞を書く場合がありますが、神殿を建てたとか、王の業績を書くときは、人物像の内側でなくて、まわりの空白部分に書くというのが基本です。つまり、文字が人物の裳裾の内に書かれることに類例が無く、異例なのです。

(2) 次はウルナンシェの名の書き方です。ウル

ナンシェ時代、まだ読み順どおりに書かないのです。書き順と読み順が違うのです。シュメール語表記には限定詞というのがあって、例えば神を示す記号 (dingir) だと、限定詞のうしろ続く文字が神の名を示しますよという、その記号を付けるようになっていました。このウルナンシェ碑文では、ウルナンシェの名を [神の限定詞—ウルナンシェ] の順序に書いています。神の名と限定詞が、ウルという文字で分断された書き方になっていますが、こうした書き方は他に類例がありません。限定詞はその直後の文字に係って初めて機能するのですから、この書き方では、ウルが神名となってしまいます。変ですね。あり得ない書き方と言えます。

(3) 最後が、女神の描き方です。手に何かを持って踊っているようにも見えますが、ウルナンシェの曾孫エンメテナの碑文に描かれた女神と比較しますと、たいへん似ています。エンメテナ碑文の女神がイナンナであればいいのですが、ナンシェ神なのです。ラガシュの都市神ニンギルス神の妹神とされているナンシェという神がいるのですが、その神です。描き方が、両者よく似ているのですね。豊穰性を示すということから考えると、私は、このエンメテナ碑文のようなものを手本にして、近代の誰か捏造したのだらうと思っているわけです。

人は、私以外の人ですけれども、従来の常識にしたがって、古い時代からイナンナは豊穰神であり続けたと思っています。それから、神殿竣工の祝宴に女性が出てきてもいいと思っています。つまり私が新しく言ったことを、ことごとく否定しているということは、逆に言えば、当時の常識に

のっとなって捏造したということなのです。

贋作と思われるウルナンシェの碑文は、ラガシュ出土のはずで、そこはフランス隊が発掘しましたから、発掘品のほとんどはパリのルーブル美術館に所蔵されています。ところがこの碑文はイラク博物館にあるのです。いつ収蔵されたかもわかっていないのですね。そういう出处事情を考えても、贋作の可能性が濃厚になるのです。

私は、このウルナンシェの碑文を贋作あり、史料価値はないというかたちで、私の説を守ろうという気になっているのです。

おわりに

多神教の世界、シュメールの神と、神にかかわって王権を少し考えていたのですけれども、まだまだいろいろわからない点だとか、しなければならぬ点があります。最初に言いましたように、このシュメールの時代というのは私たちの時代とは違う。つまり枢軸時代、前1千年紀のよりまだ1000年以上昔でありますけれども、この時代は無価値であるとか、知的なレベルが低いとか、そういう話では絶対にならないということです。これはエジプトも含めてそうなのですけれども、人間というのは、それぞれの時代に合わせて世界を考える。あるものを特徴付けて、そこに名を与えたりしながら、この世界を理解しようとしていたわけです。その特色を知ることが、やはり私たちにとって大事な研究の目標になるのではないかという気がしています。それを結論として、今日の講演を終わらせていただきたいと思います。ご静聴ありがとうございました。